



乳幼児版養育スキル尺度の作成
-乳幼児版ペアレント・トレーニングに向けて1-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター 公開日: 2017-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立元, 真, 武井, 優子, 上富, 望子, Takei, Yuko, Uetomi, Misako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5959

乳幼児版養育スキル尺度の作成 - 乳幼児版ペアレント・トレーニングに向けて 1 -

立元 真¹ 武井 優子² 上富 望子³

The Development of Parenting Skills Scale for Mothers of Toddlers 1

Shin TATSUMOTO, Yuko TAKEI, Misako UETOMI

子育て支援の方策としては三つの方向性があげられる。一つめは, 子育て中の親に対して子育てにかかわる費用の負担を軽減するための経済的な支援である。「子どもの貧困」と称される社会現象とそれに応えるムーブメントとしての支援活動が行われつつある。二つめは, 保育制度改革である。これは厚生労働省と文部科学省のリードで認定こども園の設置として実現されている。待機児童の減少はこの成果でもあるが, 他方で, 少子化がその後押しをしているという残念な現実もある。子育て支援の方策の中で最も地味で, 我が国の行政の反応が鈍いのが, 子育てのノウハウ面を支援し, 親としての成長を支援する方策である。そして, 海外で様々なシチュエーションでの子育てのノウハウ面からの支援プログラムが先行して開発・実践され, その中でもエビデンスに基づいて選択されているものがペアレント・トレーニングと呼ばれるプログラム群である。

このペアレント・トレーニングの1つの課題は, 3歳未満の子どもを持つ親に対するプログラムの開発であり, いくらかのチャレンジが始まっている (Bywater & Hutchings et al., 2011; Van Zeijl & Mesman et al., 2006)。3歳未満の子どもの急激な発達とその個人差の大きさのために, 集団形式で受講する子育て介入プログラムはなかなか普及してこなかった。その一方で, 子ども子育て支援法の施行による, 就労中の母親に代わって子どもを保育する認定こども園の広がり, 逆に, 保育所や認定こども園などの保育機関に預けられている子どもの親子の間の心豊かな相互作用の時間や機会の推奨や, 短くなった接触時間の中での適切な親の子育てスキルを普及させる機会の必要性を高めている。さらには, 子育てをノウハウ面から支える支援プログラムによって, 若い親たちが子育ての喜びを実感しその風潮が広がることは, 単に経済的な支援をするだけよりも, 実質的かつ効果的な少子化対策となりうると思われる。

1歳から3歳までの時期は, Bowlbyの愛着の発達段階の第3段階に相当する時期であり, 第1愛着対象者となる母親と子どもの間の日々の親密な相互作用の中で, 内在化されていく愛着

¹宮崎大学大学院教育学研究科

²宮崎大学医学部小児科

³はなまるプロジェクト

対象の表象が形作られていく時期である。そのために、子どもに安心感・安定感をもたらす安定的な相互作用を重視しながら、年齢に即した生活上のスキルや生活習慣を形作って行くことが必要となる。他方で、母親にとってのこの時期は、授乳の終了や次子の妊娠出産、あるいは職場への復帰など、性ホルモンの分泌の変化や家庭内あるいは外での急激な環境の変化や課題が発生する時期である。子どもが1歳から3歳までの時期は、このような母親のメンタルヘルスの危機対応を考慮に入れたペアレント・トレーニングのプログラム開発が必要とされる時期である。

我々のこれまでのペアレント・トレーニングのプログラム開発の実践は、はなまる幼児版ペアレント・トレーニングプログラム（立元・古川・福島, 2015）、はなまるお入学準備（幼保小連携）版ペアレント・トレーニングプログラム（立元・斎田・福島ほか, 2015）、はなまる小学生版ペアレント・トレーニングプログラム（立元・古川・斎田ほか, 2012）など、対象となる特定の年齢段階の子どもを持つ母親の養育スキルを評価する尺度を作成し（立元, 2005）、母親の養育スキルをターゲットとした介入を行うことによって予防的（立元・古川・福島, 2015）あるいは個別臨床的な効果を証明してきた（立元・古川・鮫島ほか, 2015）。これらのプログラムは、子どもの行動学習の原理に基づいた教示スキルを母親がトレーニングプログラムの中で習得するものである。乳幼児版のペアレント・トレーニングのプログラムを開発するに当たっては、子どもの行動学習の原理とともに、乳幼児期の子どもの認知発達の視点と、子どもの知的・情緒的な発達の基盤となる母親との愛着関係の発達に目を向ける必要がある。その上で、子どもとの間で安定的な相互作用を行うスキルや、適切に望ましい行動を教示するスキル、さらには、幼い時期に特有な子どもの過剰な興奮を制御するスキルなどを母親に習得させるトレーニングプログラムとしての設計が望まれる。そして、このペアレント・トレーニングプログラムによる介入の成果を測定し、エビデンスを検討するための、乳幼児版の養育スキルを測定する尺度が必要となる。本研究は、乳幼児版の養育スキル尺度を作成し、妥当性・信憑性の検討を行うことを目的とする。

方 法

調査対象者

宮崎県内と大分県内における、満1歳から3歳までの子どもをもつ母親683名を調査対象とした。

協力機関

宮崎県宮崎市の9保育所、宮崎県国富町の3保育所、宮崎県高千穂町の1保育所、宮崎県日南市の2保育所、宮崎県西都市の2保育所、宮崎県延岡市の11保育所、大分県臼杵市の1保育所、以上計29の保育所の協力を得た。

調査材料

立元（2005）が作成した幼児版養育スキル尺度と、母親と子どもの相互作用や子どもに対する感受性に関して記述されたMaternal Behavior Q-set（Pederson & Moran, 1995）を参考にして、満1歳から3歳の子どもを対象に項目をしばって作成した項目群を用いた。質問項目は、全部で51項目あり、各項目について普段の子どもとの接し方を4件法（1 = まったくそうではない、2 = あまりそうではない、3 = ときどきそうである、4 = いつもそうである）で母親に自己評

定するように求めた。

手続き

質問紙は、各保育所長の許可を得た上で、各保育所の担当者を通じて、満1歳から3歳の子どもの母親に配布した。なお、対象年齢内に2人以上の子どもをもつ母親には、より年長あるいはより年少の1人の子どもについて回答するよう保育所ごとに指定して回答を求めた。また、質問紙を配布する際には、質問紙を封筒に入れて配布した。記入後、各保育所に母親から返却された封筒ごと郵送または直接回収によって集め、分析に用いた。

結 果

因子分析

25%以上の欠損値のあった質問紙のデータを除外した676名分の回答を分析対象とした。乳幼児版養育スキルの因子構造を明らかにするため、重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転による因子分析を行い、スクリープロット図を参照して3因子(39項目)を抽出した。3つの因子に分類された39項目以外の12項目は、因子負荷量が小さい項目(因子負荷量が.40未満)、共通性の低い項目、項目の精選を行った際この項目を加えるとその因子の α 係数の値が下がってしまう項目、であったため尺度から除外した。抽出された因子とそれに含まれる質問項目及び α 係数の値をTable 1に示す。

Table 1 乳幼児版養育スキル尺度

質問項目		1	2	3
1. ポジティブなかかわり ($\alpha=.874$)				
15	子どもの行動を言葉やジェスチャーで表してほめる。	.648	.048	-.051
14	子どもと視線を合わせてほめる。	.635	-.017	-.004
28	子どもに良い行動を教える時には、言葉で説明するだけでなく、手本を示すようにしている。	.611	.022	-.042
36	子どもが良くない行動をした時は、良い行動を教える。	.607	.171	-.129
17	子どもに何かを教える時、手本を示して見せる。	.588	.108	-.010
7	触れることによって愛情を表現する。	.582	.027	.087
27	子どもが何か失敗した時には、はげましてチャレンジさせる。	.562	.064	-.045
29	子どもの合図に応じる。	.553	-.026	.052
2	子どもの行動が失敗に終わっても、その努力を認め、言葉にして伝えてあげる。	.529	-.09	.028
44	子どもの発想にのって、ごっこ遊びやものまね遊びを一緒にする。	.509	-.066	.058
11	子どもがした良い行動を、親がどんなふうにも思っているかを子どもに伝える。	.502	.174	-.099
23	子どもがあなたと一緒に遊びたがっている時は、それに応じるように心がけている。	.485	-.192	.141
3	子どもがたとえあなたの理想と一致しなくても、子どもを一人の人間として尊重している。	.463	-.082	.026

5	子どもに対して前向きな気持ちである。	.456	-.165	.060
6	子どもが抱っこを求めてきたときには、抱っこをしてあげる。	.449	-.074	.111
12	子どもが笑ったり声を出したりした時に子どもの方に注目する。	.441	-.036	.007
4	子どもの見える範囲に絵本などをもってきて、興味を持たせようとする。	.439	-.003	.024
40	子育てに関してよく分からないことがあると、調べたり誰かに相談したりして、解決策を探す。	.411	-.032	.038
2. ネガティブなかかわり ($\alpha=.852$)				
37	子どもの行動にかつとなると、たたいたり怒鳴ったりしてしまう。	.037	.742	-.138
45	子どもが良くない行動をしたらたく。	.021	.627	-.120
24	子どものしたことが気に入らない時は、しばらく冷たくしてしまう。	.013	.617	.058
22	あなたが不機嫌な時には、子どもが話しかけてきたり寄り添ってきたりしても相手にしない。	-.097	.584	.094
46	子どもに指示をした後に、“早く、早く”という言葉は何度も繰り返す。	.064	.580	-.118
9	あなたの気分次第で、子どもからの働きかけに応えたり応えなかったりする。	-.032	.563	.083
51	子どものしたことが気に入らない時は、子どもの好きなもの（おもちゃ、おやつなど）を取り上げる。	.053	.553	.028
31	その時のあなたの気分次第で子どもに罰を与える。	-.032	.551	.143
8	子どもが間違った行動をした時には、大声で叱る。	.119	.539	-.114
32	子どもの合図に対する解釈があなたの気分が変わる。	-.068	.460	.159
49	あなたが楽しむために、子どもを一人で遊ばせておく。	-.073	.456	.209
20	あなたの子どもの良くないところに目がいく。	.017	.417	-.042
34	子どもからの手助けを求める合図に気づいても、すぐ応えなかったり、応えそなかったりする。	-.113	.403	.065
3. 子ども主導 ($\alpha=.794$)				
38	子どもが欲しがるときにおやつを与える。	-.072	-.022	.726
13	子どもが欲しがらだけ（量）おやつを与える。	-.048	-.114	.714
35	授乳や食事の時、子どもが欲しがら分だけ飲ませたり食べさせたりする。	.026	-.083	.557
18	ごはんは、子どもが食べたい時に食べさせる。	-.032	-.030	.544
16	始めは“いけない”と言っているけど、子どもがその行動を続けると、最後には許してしまう。	.032	.034	.543
30	子どもに言うことを聞かせることは必要だと感じているが、それが大変な時には、つい、したいようにさせてしまう。	.108	.084	.541
50	子どもとのいざこざが面倒な時には、子どもの願いをかなえてあげる。	.038	.257	.487
39	子どもと一緒にいる時、子どもの欲求は全て何でも受け入れる。	.219	-.019	.445

『ポジティブなかかわりスキル』の因子（18項目、 $\alpha=.874$ ）

最初の質問項目のグループは、「子どもの行動を言葉やジェスチャーで表してほめる。」「子どもと視線を合わせてほめる。」「子どもに良い行動を教える時には、言葉で説明するだけでなく、手本を示すようにしている。」「子どもが良くない行動をした時は、良い行動を教える。」

「子どもに何かを教える時、手本を示して見せる。」などの計18項目から構成される。クロンバックの α 係数は.874であり、高い内的一貫性が示された。これらの質問項目は、子どもの行動をほめたり、子どもに望ましい行動を教えたり、子どもに情報を発信したりするなど、子どもや子どもの行動を肯定的に捉え、母親が子どもに対して望ましい、適切な相互作用をする行動傾向を示しているため、『ポジティブなかかわりスキル』の因子と命名した。

『ネガティブなかかわりスキ/の因子 (13項目, α = .852)

次の質問項目のグループは、「子どもの行動にかつとなると、たたいたり怒鳴ったりしてしまう。」、「子どもが良くない行動をしたらたたく。」、「子どものしたことが気に入らない時は、しばらく冷たくしてしまう。」、「あなたが不機嫌な時には、子どもが話しかけてきたり寄り添ってきたりしても相手にしない。」、「子どもに指示をした後に、“早く、早く”という言葉は何度も繰り返す。」、「その時のあなたの気分次第で子どもに罰を与える。」、「子どもが間違った行動をした時には、大声で叱る。」などの計13項目から構成されている。クロンバックの α 係数は.852であり、十分に高い内的一貫性を示している。これらの質問項目は、母親の気分次第で子どもへの対応が変わるためにしつげに一貫性がなくなっていたり、子どもに対して身体的・感情的な罰を与えたりといった、子どもと上手く接することができず、子どもや子どもの行動を否定的に捉え行動してしまう母親の傾向を示しているため、『ネガティブなかかわりスキル』の因子と命名した。

『子ども主導』の因子 (8項目, α = .794)

次の質問項目のグループは、「子どもが欲しがるときにおやつを与える。」、「子どもが欲しがるときだけ(量) おやつを与える。」、「ごはんは、子どもが食べたい時に食べさせる。」、「始めは“いけない”と言っているけど、子どもがその行動を続けると、最後には許してしまう。」、「子どもに言うことを聞かせることは必要だと感じているが、それが大変な時には、つい、したいようにさせてしまう。」などの計8項目から構成された。 α 係数は.794であり、十分な内的一貫性が示された。これらの質問項目は、子どもに主導権を奪われ、子どものしたいようにさせてしまう行動傾向を示しているため、『子ども主導』の因子と命名した。

因子間の相関

上記の因子分析で抽出した3つの因子同士の関係についてPearsonの相関係数を算出した。

Table 2 因子間の相関 (N=676)

	ネガティブなかかわり	子ども主導
ポジティブなかかわり	-.438**	-.061
ネガティブなかかわり		.231**

* $p < .05$ ** $p < .01$

その結果をTable 2に示す。

それぞれの因子同士の関係について検討すると、『ポジティブなかかわりスキル』と『ネガティブなかかわりスキル』との間の相関係数は $r = -.438$ ($p < .01$)であった。『ポジティブなかかわりスキル』が高い母親は『ネガティブなかかわりスキル』が低いという、逆方向の特性であることが示された。

次に、『ネガティブなかかわりスキル』と『子ども主導』との間の相関係数は $r = .231$ ($p < .01$)

であり、弱い正の相関が示された。

基準関連妥当性

母親の心理的ストレス反応との関係

70名のサンプルをもとに、乳幼児版養育スキル尺度と母親の心理的ストレス反応尺度（新名・坂田・矢富・本間，1999）の関係を検討した。乳幼児版養育スキル尺度の3つの下位尺度と母親の心理的ストレス反応の13の下位尺度とのPearsonの相関係数をTable 3に示す。それぞれの因子同士の関係について検討すると、『ネガティブなかかわり』と情動的ストレス反応である『抑うつ』、『不安』、『不機嫌』、『怒り』との相関係数は、それぞれ $r=.341$ 、 $r=.311$ 、 $r=.466$ 、 $r=.401$ であり、『ネガティブなかかわり』が高い母親は、『抑うつ』、『不安』、『不機嫌』、『怒り』が高いという、正の相関が見られた。

Table 3 養育スキルとストレスの相関 (n=70)

	ポジティブ なかかわり	ネガティブ なかかわり	子ども主導
抑うつ	-.017	.341**	-.001
不安	-.010	.311**	.052
不機嫌	-.301*	.466**	-.136
怒り	-.187	.401**	-.143
自信喪失	-.045	.324**	.053
不信	-.105	.442**	-.065
絶望	-.048	.355**	-.068
心配	-.038	.330**	-.089
思考力低下	-.059	.414**	-.007
非現実的願望	-.108	.356**	-.068
無気力	-.085	.384**	-.030
引きこもり	-.004	.278*	-.007
焦燥	.003	.230	-.100

* $p < .05$ ** $p < .01$

次に、『ネガティブなかかわり』と認知行動的ストレス反応である『自信喪失』、『不信』、『絶望』、『心配』、『思考力低下』、『非現実的願望』、『無気力』、『引きこもり』との間の相関係数は、それぞれ、 $r=.324$ 、 $r=.442$ 、 $r=.355$ 、 $r=.330$ 、 $r=.414$ 、 $r=.356$ 、 $r=.384$ 、 $r=.278$ であり、『ネガティブなかかわり』が高い母親は、『自信喪失』、『不信』、『絶望』、『心配』、『思考力低下』、『非現実的願望』、『無気力』、『引きこもり』が高いという、正の相関がみられた。

『ポジティブなかかわりスキル』と、『不機嫌』のストレス反応との間に負の相関関係が有意であった。

子どもの問題行動傾向との関係

乳幼児版養育スキル尺度と子どもの問題行動傾向（アイバーク，2016，以下ECBI）との間の相関係数（ $n=62$ ）をTable 4に示す。

Table 4 養育スキルとECBIの相関 (n=62)

	ポジティブ なかかわり	ネガティブ なかかわり	子ども主導
強度得点	-.287*	.529**	.277*
問題得点	-.250	.458**	.198

* p < .05 ** p < .01

『ポジティブなかかわりスキル』と『強度得点』との間には、弱い負の相関 ($r = -.287, p < .05$) が見られた。また、『ネガティブなかかわりスキル』と『強度得点』 ($r = .529, p < .01$)、『問題得点』 ($r = .485, p < .01$) との間それぞれ中程度の正の相関が有意であった。次に、『子ども主導』と『強度得点』の間には正の相関が有意であった ($r = .277, p < .05$)。

考 察

本研究の目的は、乳幼児版養育スキル尺度を作成し妥当性を検討することであった。

幼児版養育スキル尺度 (立元, 2005) と、母親と子どもの相互作用や子どもに対する感受性に関して記述されたMaternal Behavior Q-set (Pederson & Moran, 1990) を参考にして、満1歳から3歳の子どもの対象に項目をしぼり、保育所において満1歳から3歳までの子どもをもつ母親のデータをもとに、因子分析を行った。この結果、乳幼児をもつ母親の養育スキルについては、『ポジティブなかかわりスキル』、『ネガティブなかかわりスキル』、『子ども主導』の3因子39項目が抽出され、構成概念的妥当性が示されるとともに、それぞれ十分な内的一貫性が示された。

『ポジティブなかかわりスキル』の因子は、子どもの行動をほめたり、子どもに望ましい行動を教えたり、子どもに情報を発信したりするなど、子どもや子どもの行動を肯定的に捉え、母親が子どもに対して望ましい、適切な相互作用をする子育ての行動的スキルを評価する18項目で構成される。これらは、それぞれ、子育てをするうえで望ましい養育スキルであるため、この因子の得点は高い方が好ましいと考えられる。

『ネガティブなかかわりスキル』の因子は、母親の気分次第で子どもへの対応が変わるためにしつけに一貫性がなくなっていたり、子どもに対して身体的・感情的な罰を与えたりといった、子どもと上手く接することができず、子どもや子どもの行動を否定的に捉えてしまう母親の子育ての行動的スキルを評価する13項目で構成される。これらは、それぞれ、子育てをするうえで望ましくない養育スキルであるため、この因子の得点は低い方が好ましいと考える。

『子ども主導』の因子は、子どもに主導権を奪われ、子どものしたいようにさせてしまう行動傾向を評価する8項目から構成される。この因子の得点は、高すぎると子どもの自主性を尊重しすぎるあまりに子どもに振り回されていることを示しており、低すぎると子どもを母親に従わせることが多く、子どもの自主性が失われていることを示す。そのため、この因子の得点は、高すぎても低すぎても好ましいとは言えず、平均値周辺の範囲内の得点が好ましいと考えられる。

さらに、それぞれの因子間の相関関係について検討したところ、『ポジティブなかかわりスキル』の因子と『ネガティブなかかわりスキル』の因子との間に、負の相関が認められた。

『ポジティブなかかわりスキル』が、より望ましい子育て行動の項目から構成されるのに反して、『ネガティブなかかわりスキル』は、母親による感情的な行動傾向や罰などの不適切な子育て行動の項目から構成されており、妥当な関係性が示されていると考えられる。また、『ネガティブなかかわりスキル』と『子ども主導』との間に弱い正の相関が認められた。『子ども主導』の得点が高いということは、子育ての中で子どもに主導権を握られ1～3歳の乳幼児に振り回されて子育ての一貫性を失った状況で生活している状態であると考えられる。そのような状態の母親は、子どもを適切に導くことができず、混乱し感情的な反応として子どもに身体的・感情的な罰を与えるような『ネガティブなかかわりスキル』の行動傾向が高まってしまうという2つの因子の関係性が考えられる。逆に、『子ども主導』の得点が極端に低い場合には、子どもに対する支配傾向が強くなりすぎてしまい、これもまた、子どもの自発的な活動性や自然な対人的やりとりの中での行動学習を妨害してしまうことになる。こういった、『子ども主導』の両極に偏った子育て行動の傾向は、高すぎても低すぎてもネガティブであるが、『子ども主導』が極端に低くなる傾向は、母親への依存が強いかつそれが自然である一般の家庭での1～3歳の乳幼児の子育てにおいては比較的少ないのではないかと考えられる。

本研究で作成した乳幼児版養育スキル尺度の基準関連妥当性を検討するために、母親のストレス反応尺度における測定結果およびECBIとの関係性を検討した。

乳幼児版養育スキルの3因子と母親のストレス反応の13因子との因子間相関を検討したところ、乳幼児版養育スキルの『ネガティブなかかわりスキル』と母親の『抑うつ』、『不安』、『不機嫌』、『怒り』といった感情的ストレス反応、また、『ネガティブなかかわりスキル』、『自信喪失』、『不信』、『絶望』、『心配』、『思考力低下』、『非現実的願望』、『無気力』、『引きこもり』といった認知行動的ストレス反応との間で、それぞれ有意な正の相関が見られた。すなわち、『ネガティブなかかわりスキル』の得点が高い母親は、子どもの不適切な行動を導き出してしまい、その結果としてストレス反応が高くなってしまう。また逆に、高いストレス反応のために、冷静に子どもに対応する余裕を失い、その結果として短絡的かつ感情的に『ネガティブなかかわりスキル』を選択しまた恒常化させてしまう。このような悪循環のパターンを実証するような、論理的に妥当な関係性が示されていると考えられる。

さらに、養育スキルとECBIとの因子間相関を検討してみると、『ポジティブなかかわりスキル』とECBIの『強度得点』との間で有意な負の相関が認められ、また、『ネガティブなかかわりスキル』と『強度得点』との間、『ネガティブなかかわりスキル』と『問題得点』との間で、それぞれ有意な正の相関が認められた。すなわち、母親の望ましい養育スキルである『ポジティブなかかわりスキル』が高ければ子どもの問題行動傾向の評価は低くなり、また、母親の不適切な養育行動が多く『ネガティブなかかわりスキル』が高いと子どもの問題行動傾向の評価は低くなるという、妥当な関連性が認められた。さらに、『子ども主導』と『強度得点』の間にも有意な正の相関が認められた。この関係性の解釈は複雑であるが、乳幼児版養育スキル尺度の『子ども主導』の得点が極端に高いという事態は、母親が、子どもを導きリードすることが困難な状態であると解釈することができる。このような状態は、子どもの不適切な行動を制したり、代わりの望ましい行動を教えたりという親の活動がうまくいかない状態であると考えられるので、当然子どもの激しい不適切な行動が多くなるという説明がつく。

以上のように、本研究で作成した乳幼児版養育スキル尺度は、母親のストレス反応尺度の測定結果およびECBIの測定結果との間に妥当な関係性が認められた。また、これらの関係性を

逆に解釈すると、乳幼児版のペアレント・トレーニングプログラムによる介入で、母親の『ネガティブなかかわりスキル』を改善することができると、そのことが子どもの行動傾向や子どもとの相互作用を改善し、母親のストレス反応を低下させていくことが期待できる。さらに、母親の『ポジティブなかかわりスキル』が改善されると、子どもの望ましい行動を高め、また逆に、不適切な行動傾向を減らしていくことができることも期待できる。本研究の一環として示した、乳幼児版養育スキル尺度と母親のストレス反応尺度やEybergの子どもの行動尺度との関係は、乳幼児版のペアレント・トレーニングプログラムによる効果を予想させるデータも示している。

引用文献

- Bywater T.J., Hutchings J.M., Gridley N., & Jones K. (2011) Incredible Years Parent Training Support for Nursery Staff Working within a Disadvantaged Flying Start Area in Wales: A Feasibility Study : Child Care in Practice, 17, 285-302.
- アイバーク S. (2016) 日本語版ECBIアイバーク子どもの行動評価尺度 千葉テストセンター
- Pederson D.R. & Moran G. (1995) Caregiving, Cultural, and Cognitive Perspectives on Secure-Base Behavior and Working Models'New Growing Points of Attachment Theory and Research, Monographs of the Society for Research in Child Development. 60, 247-254.
- 立元真 (2005) 幼児の親に対する予防的な養育スキル・愛着関係改善トレーニング 平成15-16年度科学研究費補助金基盤 (C) 研究成果報告書
- 立元真・古川望子・斎田聖美・椎葉恵美子・福島裕子 (2012) 小学生版予防的ペアレント・トレーニングの試み (2) 行動療法学会第38回大会発表論集124-125.
- 立元真, 古川望子, 鮫島浩, 布井博幸, 池ノ上克 (2015) 周産母子センター・小児科より紹介された子どもの個別ペアレント・トレーニング - 予備的な無作為比較試験 - 行動療法研究 41, 127-135.
- 立元真, 古川望子, 福島裕子 (2015) 宮崎における幼児を対象としたペアレント・トレーニングの展開 - ペアレント・トレーナー養成という実践のありよう - 臨床発達心理実践研究 10, 46-52頁.
- 立元真・斎田聖美・福島裕子・瀬戸山由香里 (2015) 幼保小連携のためのペアレント・トレーニングの実践 日本教育大学協会研究年報 33, 317-327.
- Van Zeijl J., Mesman J., Van IJzendoorn M.H., Bakermans-Kranenburg M.J., Juffer F., Stolk M.N., Koot H.M., & Alink L.R. (2006) Attachment Based Intervention for Enhancing Sensitive Discipline in Mothers of 1-to 3-Year-old Children at Risk for Externalizing Behavior Problems A Randomized Controlled Trial. Journal of Consulting and Clinical Psychology 74, 994-1005.

付 記

本研究の遂行に当たっては、科学研究費補助金基盤研究 (B) 24330201の補助を得た。
本研究を含む一連の研究計画は、宮崎大学教育文化学部研究倫理審査委員会の研究倫理審査を経て遂行された (宮崎大学教育文化学部研究倫理審査委員会 平成24年2号)。
また、本研究の遂行に当たっては、研究室の学部学生であった、斎藤葵、蓮子美喜、阿萬恵理花、新智帆、海老沙也香、森山紗也子、神原志保、青山奈緒美、村上昌平の各氏の助力を得た。